

NAGOYA DENKI-GAKKOO KOOHOO

生徒募集

晝間部第一學年ハ無試験入學
入學式 四月八日

ナホ晝夜間部トモ各年缺員多少アリ
詳シクハ學校ヘ問合ハサレタシ

名古屋電氣學校

市内中區新榮町三丁目
電話 東一七番

校報

昭和五年
三月號

5

斷 雲 錄 五 風 山 人

○わが小庭の松の木蔭にたゞ一本の沈丁花がある。もう大分に蕾がふくらんで紅の珊瑚のやうに潤ひと光澤を持つて来た。早春の若々しい光りに浴して小さい枝が伸び伸びとしてゐる。この今に開かうとして春の陽を待つ花の心は純真な乙女の心にも似た輝しさと明るさに満ちてゐる。生氣が内に充實してゐる。明日の光りを待つて今日の營みに努めてゐるやうだ。こゝに深い意義がある。

○生と死。明と暗。この両面に沈潜して、一道の光明を見出さねばならぬ。生も一時、死も亦一時である。明の極は暗となり、暗の極はやがて明となる。この交錯。この對比こゝに宇宙の秘奥が潜在してゐる。

○病について考へる。病は四大苦の一で誰しも欲しない悪魔である。併し、人間の一生の中に、この病魔の見舞を受けない者はまことに少ないであらう。自分は、今、その病をして意義あらしめたい。そもそも病氣は、自然の神が、人間に與へた鞭である。病氣は、生命を大切に守らせるため人間の警告である。病氣は人間に生命を保有せしめるための薬石に等しい。死人には病はない。生命慾の旺盛なる者に病魔が入り易い。こゝに面白い生命の神秘が存してゐる。病氣の人間に生ずる所以についてはよく之を考へて、人間の生命力の不可思議な点に心を用ゐたい。

○病に克つには強大な意力が要る。常に生の活力を充實せしめねばならぬ。古來大業を成してゐる者に異常な病魔に悩まされたものがかかりに多い。而してその偉大な人物には、却つてその病氣が幸してゐるかのやうに思はれる。その例は決して乏しくない。ベートウベンが音楽家の第一の生命である聴覺を失つてゐた。又、現にエヂソンも聾である。聾耳のベートウベン又はエヂソンが、不朽の偉績を完成してゐることに驚異を感せずには居られぬ。盲人には、まゝ目あきも及ばぬ人物がある。堀保己一は誰しも知る學者であり、米國の、エレン・カイは又近代稀に見る學者。

しかも盲目で聾耳で啞である。芭蕉は一生胃腸が弱く痔疾に悩み通した。子規は、病床に呻吟すること六ヶ年、その有様は、『病牀六尺』『仰臥漫録』に明かで坐ろに涙を催さしめる。足一步も戶外に出づることも出来なかつた晩年の子規は、病床に血を吐きつゝも、和歌革新のためには壯者をも凌ぐ大氣魄を以て自己の藝術論を吐いてゐた。洵に一道に精進して、自己を完成することに努力した真人は、病氣なるものに打ち克つて、たゞ道その者を樂しんでゐる。病あるがために却つて、精神は一点に集注せられ統一せられ専心一意わが使命に忠實である。故によく、凡人の及ばぬ偉業を成就したのである。こゝに於て、眞に物を爲さんとする者には、病魔も彼等に對しては幸なるかなだ。一道に精進して、自己の天命に忠なる者には、如何なる悪魔も自ら退散する。内に充實せる大精神が横溢して、常に病魔を征服してゐるからである。常に、大理想を心に抱いて、一道の光明を目指し、不斷の努力を積んで、向上の一路を

辿る者には、金剛不壞の大精神力を内に蓄へ、自己の身心を錬磨して、自己の大道を直進せねばならない。古人精進の跡に鑑みねばならない。

○『一刀三禮』といふ言葉がある。眞の藝術は生命の直接な表現である。敬虔な心、純粹な魂の響きである。一言一句一音一律も、決して容易には生れない。血と涙との結晶である。人も知る如く、トルストイは、『戦争と平和』を七回も書き直した。小泉八雲は、その稿を幾度改めたか知れぬ芭蕉は、一句を成すに、數年を要したのもある。眞の自己を表象するには、推敲に推敲を重ね、敬虔清虚の心を以て自己の感動を如實に顯現せねばならぬ。全生命を以て、己れの藝術に向はねばならぬ。永遠不滅の生命はみなかゝる大苦行から得られた賜ものである。決して、易行道では大覺を得られない。

○生命の尊さを如實に知る者のみに、光陰の大切なことが悟られる。賦與されたこのわが身命の尊さ。これを悟らないものは到底救はれない人間である。ロングフェローは朝飯前の十五分時を利用して、遂に、ダンテの神曲を英譯した。『時の利用と時の分配』。こゝに留意しなくてはならぬ。尊い貴い身命だ。無意義な人生は死に等しい。『この吾』を省察して、こゝに吾が儼然として存在せることを自覺せねばならない。自己存在の意義に徹せねばならない。『天上天下唯我獨尊』と獅子吼した大聖の聲に汝の魂を見出せ。

○如月の夜は次第に更けて行く。もう、家の者はみな深い眠りに入つてゐるらしい。わが膝頭のあたりに寒さが襲うて来た。しかし、この夜の沈黙の中にも、かすかに動いてゐるものがあるを感じる。それは春へ春へとの生命の進行の序曲だ。四邊は静かだ。何物の音もない。たゞ幽かにきこえるは孤松の梢にこもる空の風の音のみだ。松の梢の響きに、宇宙微妙の相を觀じつゝこの筆を擱す。

(昭和五年二月廿日總選舉のありし夜、思ふまゝを)

唐 詩 妄 評 (一) 杏 西 散 人

英のマコーレイは其著ミルトン論に於てミルトンを賞揚しホーム、ダビッドなどに次ぐべき詩聖なる所以を詳評して居りますが其中に詩作に就て左のやうな意味を述べて居ります。

凡そ詩作をする人は其創作の時先づ小兒の境地に還れ、原始を温ねよ、而して具さに自然の聲に聽け。

小兒は想像力に富み夢の天國を持つ此の夢と自然との合致する所其處にホームの詩ダビッドの歌が生れる。

實に千古の名言だと思ひます、そして此の事は單り洋詩にのみ限る譯ではなく漢詩にも和歌にも俳句にも服膺せらるべき通則とも稱すべきものであつて苟も此の一偈に矛盾するものは渾べて凡桃俗李の駄作たることを免れぬものだと思ひます。

マコーレイの自然の聲に聽けと申しますのは子思の謂ふ所の『天の命之を性と謂ふ性に率ふ之を道と謂ふ』の性なり道なりに外ならぬものでありまして之に即して風咏すれば

其詩は期せずして自ら珠玉となるのであります。

自然の聲を風咏するとすれば詩には議論を禁物とするのは當然の歸結とせなければなりません。去ればとて性に率ふ主張をまでも禁する譯ではありませぬ。古來叙情詩の秀でたるものは却て叙景詩の秀でたるものにも優つて愛誦せらるゝのは全く此の理由からであります。

性に率ふ主張の好適例としては詩經周南の一聯を挙げれば澤山だと思ひます。

關々たる雎鳩は河の洲に在り

窈窕たる淑女は君子の好求

初學の人の爲めに之を釋きますと、雎鳩はミサゴとかいふ鳥の名でありまして至つて夫婦仲のよい鳥ではあります。夫婦の別は中々嚴格のものだとせられて居ります。關々たる美音を立て、鳴くミサゴは仲睦まじく河の中の洲に遊んで居る、彼を見るにつけても、身だしなみの正しい美しい娘さんは徳の有る若人の好んで戀ふる處である、といふ意味であります。自己を銜はず繕はず率直に、正しき男子は淑しき女を愛するものだと言ひ切つて居る所に昔の人の昔らしさが偲ばれます。

詩は志を言ふと云へる支那人の語が何處まで正鵠を保つかは性に率ふ軌道を外づるゝや否やを以て判すべきであります。苟も此の軌を外れんとする場合には之を詩に作らず寧ろ賦にでもした方が可いと思ひます。賦は韻を押し散文です。幾らでも議論が續けられます。私は古人の詠史などに議論がましいのを見ます。能く左様思ふ事があります。私は中道にして詩を廢しましたが今以て古人の詩は讀

みます。古詩古歌、氣品の高い風韻の饒かな者は那時吟誦して見ても吾人の心境を清からしむるものか有ります。頃者小閑を得ましたので唐詩の數首に妄評を加へて初學の人に披露しやうと思ひます。

江村即事

司空曙

罷釣歸來不繫船

江村月落正堪眠

縱然一夜風吹去

只在蘆花淺水邊

訓 釣をやめて歸來船を繫がず、江村月落ちて正に眠に堪へたり、縱然一夜風吹き去るも、只在らん蘆花淺水の邊に。

此詩は私が詩を知り初めてより今日に至るまで愛誦禁じ得ない詩であります。一體詩歌に限らず書畫其他渾べての藝術に對する鑑賞眼は其人の年齢の加はるに従つて逐次變化するのが大抵普通であります。隨つて往年敬意を拂つてゐた藝術品が後年に及んで何等感興を惹かなくなるといふが如きは誰しも有り勝ちの事であります。然るに此詩は若きより老ふるまで私の心を能く惹き附けて居ります。其れは本來何處が佳いのでせう。

娛樂の後の疲れ、眼くて慵い。

此の自然の感じを有りの儘に何等の淀みなく言ひ做したる手法、而かも花やかに言ひ做しながら些かの繕ひを見せない、謂は、天人の獨語でも聞くが如く耳なごやかに響く處に一種言ひ知らぬ詩趣が有るからであります。

釣をやめて歸つて來ると、江村の夜色は思ひの外に更けて居て急に眠くて堪まらない、船を繫ぐも面倒だ、ほつて置け、今晚風が吹いたにしても、蘆花の有る淺

瀬あたりより外へは行くまい。

扱て轉句の縱然の二字であります、先人は皆之を縱令、縱使と同一に視てタトヒと讀まして居りますがチト淺はかな見方かと思ひます、縱然を縱令と同意義に用いた例が何處に有るのでせうか、一體日本の儒者は一般に漢字の用法を疎かにする嫌ひが有ります、山陽にしてからが星巖にしてからが此の弊の爲めに往々其の破綻を詩文に現はして居ります、ことは日本外史の開卷劈頭下符の字を見ても能く判るところです、私共は幸に時代に恵まれて歐文を讀むことを教へられ語學的解剖も知り又歐文を棒讀みにして意義を解する事も習ふの結果翻つて歐文と同一語系に組立られてゐる漢文漢詩を讀む場合山陽の眼星巖の眼よりは多小精細に検討し得る頭腦を作り上げられたる事は全く仕合せであると思ひます、殊に明清の支那小説が豊富に輸入せらるゝ今日之に依りて漢語の生きたる扱ひ方を知るの便を得たる事は尙更私共の幸福であると信じます。

閑話休題、縱然を儻しタトヒの義なりとすれば結句の只在は當然儘在又は任在にしなければ字句が照應しませぬでせう只在とあるのは謂はゞ縱然が縱令の義で無い證左だとも言へます、要するに縱然は任地です、儘よです、抛つて置けです、蓋し此の二字は作者の最も苦心を費せる跡を示すもので、之を按排する事に因て一脉の靈犀は全幅の詩趣を靈動し顧みては不繫船に呼應し前んでは只在を喚び起し駢比雁行三者相携へて一貫自ら珠を聯ぬるの觀が有ります。蘆花淺水の四字は讀者に如何にも明るい感じを與へ我等の眼前に瀟洒なる秋江を展開する一幅の映畫でありまして、

自らは是れ明鏡に花影を投じ秋水に月色を湛ふるが如く奸にして光を放ち清くして心を洗ふ文字であります。

只在の只の字も亦一語千金の値あるものですが、其れを知るには前の縱然の字に不即不離の照應を持つ他の字を按じて差し替へて見ると始めて能く判ります、則ち恐、自、定などを入れた所で到底只の字に及ぶものでは有りますまい本當に此の只の字は只の鼠では無いのです。

吹去は吹いて行くといふ義では有りませぬ唯吹くと云ふ意に過ぎないので、吹去吹來、斯る去來の字は助辭として尋常茶飯事に用ふる字で多くの場合に意味無しに用ひられ又反對の意にも用ゐられます詳しい事は後の詩に於て説きませう。

起句の歸來の來は半助辭でありますから先人達の訓むやうに『釣を罷めて歸り來り』と言つても差支はありませぬが成らう事ならキライと音讀にする方が原語の味が能く出ます。

結句も先人は『只芦花淺水の邊に在らん』と讀ませて居りますが是は『只在らん芦花淺水の邊に』と言はなければ不味いと思ひます、只在と在が餘りに間隔を置いて口ずさまれば前途の如く只在の二字の巧妙さが何處かへ消れて行くやうな氣がします、本來ならば詩も文でも棒讀み(吳音でも漢音でも其れは構ひませぬ)にして味はなければ漢語の眞意義に徹底しないものです、殊に漢詩は洋詩と同じく韻脚(ライム)に餘韻餘情が籠つて居るのでありますから我等が洋詩を誦じて其の餘韻餘情に涵るが如く漢詩も亦願はくは棒讀みにしたいものです。

海邊巖 甲山迂人

雲霞五色罩蓬瀛 紅旭光中瑞氣生
傍有蒼巖聳萬古 天地長久護王正

桃郎 址

桃郎去後跡茫茫 唯見犬城凌彼蒼
蘇峽猿聲何處是 却歡野雉飛秋陽

註曰 址在城東栗栖 野雉喻飛機也

觀 觥

豪軀相搏氣如虹 虎嘯龍驤颯起風
一擲乾坤誰占勝 恩讎渾是眼中空

なぜ僕は日本式ローマ字で
投票したか
こゝろだ

1

A兄——カナモジ論者であり且その勇敢なる實行者であるところの君に、何の故に僕が（カナモジに共鳴し賛成し）日本式ローマ字で最近の國會議員の選舉に投票したか？その理由をお話ししやう。

（勿論君はカナモジを以て投票されたにちがひない。投票に際して國字問題に對する意志を表示せよ！それがわれわれの標語であつた）

2

たび／＼の君との議論に於て、もはやわれわれの間には相互の考への充分なる理解があり、又一致点をも見出してゐることだが、當面の急務として、いろ／＼な点で厄介となり障りとなり又苦痛となり損失となつてゐる支那文字から國民を解放し、日本語を書き記すに横書きカナモジを以てしなくてはならぬことはもはや議論の問題ではない。實行の時期である。かくの如く君たちは叫ぶ。

このやうなカナモジ論者の主張は全く正しい。僕はそして熱烈なるカナモジ論者諸氏の運動にひそかに感激を覺え感謝の念を抱いてゐる。がそれと同時に、他方日本式（英語式に非ず）ローマ字論者の主張及び實行運動にも僕は右と同様な感を抱いてゐる。——僕自身七年前には激しい急進的ローマ字論者であり教室に於て黑板上に記す文字はすべてローマ字のみであり、漢字廢止（日常生活の實用區域から）について故後藤先生に若さの血氣でシャニムニぶつつかつて行つたこともあつた。

その頃はカナモジに對しては殆んど落ちついて眼を向ける程の雅量も無かつたし、單に理論から出發し、現實を見つめ、歴史的な見方をする力もなかつたのであつた。しかし、今の僕としてはカナモジを認める。カナモジは大によろしい、而してそれにつけ加へて云はう、日本式ローマ字大によし。（ヘボン式即ち、英語式は僕は承認出來ぬ。その理由はこゝには省く）

かくして今の僕としてはカナモジと日本式ローマ字とが共同戦線を張つて、我が國の國字問題の解決に前進するこ

どが最も賢い策であると思ふ、こゝにコウモリ的な妥協を見る人もあらう。しかしそれでケツコウだと僕は思ふ。そも／＼カナモジと日本式ローマ字とが敵對關係に立たねばならぬと思ふ事こそ狭い量見であり島國根性と云はなくてはならぬ。

二つは兩立する、手をつないで進み得る。二つを併用しても何等差支へない、漢字とカナと併用する如くローマ字とカナと併用したつて一向差支へはない、この方面に將來いろ／＼面白いことも起り得ることであらう。

そこで僕としては投票に如何なる文字を用ふるかは、二つの間の自由である。カナモジを以てするか、日本式ローマ字を以てするか？

しかるに、僕は後者を實行した。何故に？一つにはそれが昔なじみの故を以て。二つには、僕の現在の思想傾向の國際性の故に。

たゞこんな私的な理由で僕はローマ字を使つた、従つて君のカナモジ投票をすなほに肯定する。

われ／＼は國字改良の熱情に於て握手し得るのだ。以上を以て僕の辯明は終る。

六 號 雜 記

○正月のおめでたうを云ひ合つたのも、この頃の事のやうに思へるのにもう三月に入つて、學校内は試験氣分、卒業、進級期のおはたゞしさだ
○いつもながら、杏西、五風兩先生の御寄稿によつてわが校報を飾り得る事を感謝したい。

次號は四月下旬發行の豫定

南洲翁の遺訓を讀みて。

無 爲 散 人

世に南洲翁の遺訓と稱する言葉がある。之を讀んで見るに如何にも南洲翁の面目が躍如としてゐる。南洲翁の言葉でなくてはならぬ味がある。次に、その二三を録して、愚人の所感をも蛇足として書いて見よう。

○事大小となく正道を踏み、至誠を推し、一時の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、作略を用ひて一旦その差支を通せば、後は時宜次第工夫の出來る様に思へども、作略の煩冗度生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる様なれどもさきに行けば成功は早きものなり。

天下の事を處理するには、公明正大の眞心を以てせよといふ垂訓ちや。正道でなくてはならぬ。權謀や策略で一時をごまかしては、ちきにしつぽが出る。南洲翁は、竹を割つたやうにからりとした晴天白日の襟度がある大人物だから、ちつとも物にこだわらない。今の小手先きの小器用な小政治家などは桁が大分にちがつてゐる。正道は迂遠ではか行かないやうだが、急がば廻れで、却つて速いのちや、こゝが合点のしどころである。各々が臍の下に力を入れてよく考へたらいい。

○道は天地自然のものにして、人は之を行ふものなれば天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛するなり。
敬天愛人ちや。これは千古の道である。南洲翁はごこま

でも愛の人だ。涙の人だ。城山で割腹したあの最後の有様を見てよくその心が現れてゐる。道は天地自然のものと至人の見るところで、本當にさうである。道は宇宙自然の大法則で釋迦以前、孔子以前から、ちやんと存してゐるんぢや、それを心眼で見出したのが至人である。その道を悟らないから凡人で終る人ぢや。その大道を悟つて之を實地に行ふところに尊い光りが輝いてくる。天は公平で平和思無邪で、ねこひいきがない。乞食の上にも、貴人の上にも春光はあふれてゐる。太陽は輝いてゐる。神の恵みは到らぬくまがない。一視同仁ぢや。天を敬ひ神を尊んで、天の心、神の魂をわが心として、全人類に對するんぢや、トルストイの人道主義も結構ぢやが、南洲翁の方がもつと直接で端的ぢや、呵々。

○人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし。まことに有りがたい教訓ぢや。これだけを守つたらもう十分だ。この數言の訓に人生のあらゆる道が含まれてゐる。『人を相手にせず、天を相手にせよ。』名言である。とかく凡夫は、人をあてにし、相手にする。大人物は、人を相手の的にしてゐない。こゝが分別の要するところだ。南洲翁も、決して當初からこの心を持つてゐなかつたらう。非常な大修行をして人事のすべてを爲しつくした結果この至上境に達したに違ひない。翁は、離れ島にも流されて死生の境に直面したことも何回かあつた。また、無參禪師について禪もやつてゐる。王陽明の學を尊んで修業をしてゐる。たゞの人ぢやない。大苦行を積んだ偉人ぢや。

天を敬うて、人を愛する。故に、人を咎めたり人の過ちを叱つたりする心は毛頭ない。たゞ誠の心の不足を内省してゐるのみぢや。もうこゝに至ると聖人の心である。己を正うして人に求めずで、充足安心の平和な朗かな心持ちがある。こゝに達するまでの修業と工夫が並大ていぢやないよ。○道を行ふ者は天下舉つて毀るとも足らずとせず、天下舉つて譽むとも足れりとせず。自ら信すると篤きが故也實に痛快な言葉ぢやないか。堂々たるものぢや。これは決してから威張ぢやない。古來の哲人にこれと似た言葉があるが、眞の道を歩んだ者ならではこんな自信ある言葉は吐けない。汝の笑は汝の笑に任かさう。己は己の信するところを貫徹するんだ。天公のみが知つてゐる。世界ぢやの者を全部敵にしても、道のためには、己をまげない。眞理を追求して止まない。この意氣だ。この元氣ぢや。これがなくて天下に何事が出来ようか。一切を捨て、たゞ眞理に向つて直往する。南洲翁のこの言葉をよくかみしめて、自分の腹をしつかと決めるがよい。『天下舉つて毀るとも、天下舉つて譽むるとも敢て關せず、敢然とし、超然として吾れ獨り往く。』この態度こそ眞の男ぢや。『自ら信すること篤きがゆる。』と自己の肚が山のやうにすわつてゐる。實にはや生も死もない。かのソクラテスが毒を仰いで、從容死に就いたのも、この翁の心と通するところがある。天下の大事を成し、宇宙の眞を握らんとする眞の人間は、この強い自信と信念が全生命に溢れてゐる。眞理のために眞理を求める。この外に何物があらうぞ。他の一切はみな空ぢや。(昭和五年二月廿七日夜稽)